音楽学部 人文学部／人間発達学部	2023年度一般入試問題　国語	●時間／150分 ●配点／100点

一　次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

「学力」という言葉は、不思議な言葉である。誰もが知っているけれど、[1]誰もが知らないという言葉である。誰でも言葉としては知っているけれど、その具体的な中身ということになると、私の所属する教育学の世界でも、始終議論はされるものの、意見の一致をみたことはこれまで一度もない。

この「ゆとり教育」[注1]論争でも、しばしば「基礎基本が大切」といわれる。しかし、「じゃあ、その基礎基本ってなあに？」と質問すると、誰もが［　①　］をつぐんでしまう。共通するイメージは、せいぜい「九九ができる」とか「足し算引き算ができる」とか、「小学校五年生程度の漢字が書ける」とかいった程度のものでしかない。しかしそれとても、かなり[1]漠然としていて、絶対に九九ができなくてはならないのかと言われると、「なんとなく」としか答えようがないものである。

こうした状況なので、「[注2]OECD国際学習到達度調査で学力低下が」と報じられると、それぞれが勝手な思いで、「[注3]すわ！大変だ！」となってしまう。興味深いのは、なぜか「学力低下」の調査結果の[注4]オンパレードになってしまうことである。その後報じられたニュースだけでも、次のようなものが［　②　］にでてくる（いずれも朝日新聞）。

「落書きを『楽書き』　本かげを『小かげ』
漢字読み書き　子ども1万5000人調査
正答率高学年ほど低下」（二〇〇五年一月二八日）

「高3、政治・経済の理解不十分
10万人テスト」（二〇〇五年一月二九日）

「イラク　どこ？　不正解4割
大学生　北朝鮮は1割
日本地理学会の全国調査」（二〇〇五年二月二三日）

[2]こうしたニュースが、なぜかぞろぞろでてくる。面白いのはこの報じられ方である。この見出しだけをみると、だれでも「これはひどい」と思うのではないだろうか。ところがこれらはどれも[注5]トリッキーなニュースである。

最初のニュース「漢字読み書き　子ども1万5000人調査」は、本文ではこうなっている。

調査は03年の5～6月に実施。全国の53校の約1万5千人の子どもを対象に、小学校で学ぶ1006の漢字すべてについて学年ごとに身につけたかどうかを調べた。[注6]同研究所は80年にも同様の調査を行っている。80年調査と正答率を比較すると、読みは1ポイント増、書きは5ポイント増だった。学ぶ漢字数に大きな変化はなく、全体としては漢字の読み書きの力は落ちていない。

なんと、この調査で明らかになったのは読み書き能力［　A　］ではなく、その逆だったのである。見出しの最初の「楽書き」「小かげ」は、それぞれ33％と37％の誤答であったと記事は報じている。

「正答率高学年ほど低下」も、八〇年に比べての話ではない。今回調査の結果を述べているだけである。小1で習う漢字と小6で習う漢字の正答率を比較すると、「読み」では小1が89％、小6が77％、「書き」では小1が92％、小6が

16％ということであった（正答率が80％に達した字の割合）。高学年になれば「低下」するのは、残念ながら当たり前である。この結果をどう見るかは人それぞれである。記事は、誤報ではない。

しかし問題なのは、見出しの付け方である。ひときわ大きな文字で「低下」を表示すると、内容の吟味[2]をしないままに、「やはり」と思ってしまう。

次の、「高3、政治・経済の理解不十分」はこうなっている。

> 文部科学省は28日、全国の高校3年生約10万3千人を対象にした社会（地歴・公民）の学力テストの結果を発表した。9科目のうち「政治・経済」を除く8科目で文科省が期待した正答水準に達したものの、冷戦下の旧ソ連の動向など基本事項の理解が不十分だったり、資料を活用して考えを表現する力が不足したりしていることが明らかになった。

この記事も、もちろん誤報ではない。しかし同じ記事が、「［　B　］」という見出しだったらどうだろうか。まったく違った印象になるだろう。

この調査で問題にすべきなのは、「不十分」ということではなく、なぜ期待水準に達しなかったのか、水準の設定に問題があるのか、あるいはまた学校での扱い方に問題があるのか、といったより具体的な問題である。しかしこの記事の扱い方では、時期的にどうしても「学力低下」という印象のみを与えてしまう。

三番目の日本地理学会の調査の記事も、誤解を生みやすいだろう。「大学生　北朝鮮は1割」を見て、筆者は一瞬「大学生なのに、北朝鮮の位置を一割しかわかっていないのかあ」と思ってしまった。それはまったく早とちりであった。

この記事では、「イラク　どこ？　不正解4割」という大見出しが、記事の上部に二段組の横書きで、でかでかと配置されている。その右脇に縦書きの少し小さな文字で「大学生　北朝鮮は1割」と、問題の見出しが添えられている。

この記事が出された頃は、先のような「学力低下」ニュースがオンパレードの時期であった。早とちりをおこした理由は、このムードによって「学力低下」のイメージを植え付けられていたために、筆者は大見出しの「不正解4割」を、イラクの位置を「わかっていない、四割しか」と取り違え、さらにそれにつられて「北朝鮮は一割しかわかっていない」と勝手に連想したことによる。

もちろんこのことは、他愛（たあい）もない筆者の早とちりである。イラクの位置は六割、北朝鮮の位置は実に九割の大学生が正解していたのだ。しかし、この後の版では同じ記事の見出しが「4割が不正解」「北朝鮮は1割知らず」と、比較的誤解が減りそうな表現に変更されていたところを見ると、朝日新聞も早とちりな読者に誤解を与えやすい[3]表現であることに思い至ったようである。

しかし、記事の表現もさることながら[4]、この問題は、「学力低下」ムードのなかでこうした記事を読むときの、私たちの受け取り方の問題であるとも言える。「学力低下」というムードが、私たちの物事のとらえ方に案外強く影響を及ぼしていることがわかる。すると、記事ではなく、この調査自体に関する一つの問題が［　③　］してくる。

この調査の問題点は、低学力問題が喧伝（けんでん）されているときに行われていることだろう。この調査は、ＰＩＳＡの結果が発表された後の二〇〇四年の暮れから二〇〇五年の二月にかけて行われたという。近年の教科の選択制の広がりの結果、地理を履修[3]する高校生が減り続けていることに危機感をもっていた地理学会が、低学力問題のムードに［　④　］こうした調査をすることで、地理の学力も低下していることを証明して、地理教育の必要性をアピールしたいという意図[4]が明白である。

地理学会が考えなくてはならないのは[5]、単に国の位置を知っているかどうかではないはずである。そうではなく、ど

うして子どもたちが地理を選択しないのかということであろう。ある地域を、歴史・地誌・気候・経済・交通・生活・文化などの総合的視点から読み解きその地域の景観を物語るような力を育てる教育を目ざさず、暗記中心の姿勢を改めない限り、地理を選択する生徒が増えることはないだろう。

（小笠原喜康『議論のウソ』による。一部改変）

注

1　ゆとり教育…この文章の筆者が、同じ本の別の箇所で次のように説明している。「「ゆとり教育」というのは、一九九八年一二月に告示され、二〇〇二年四月から施行された「学習指導要領」（高校は翌年）によって実施された教育課程である。特徴は、「教育内容三割削減」「週五日制の完全実施」「総合的学習の時間の新設」の三つである」。

2　OECD国際学習到達度調査…OECD（経済協力開発機構）による学習到達度調査。PISAともいう。二〇〇〇年から実施されている。

3　すわ…突然のできごとに驚いて発する語。「さあ」。

4　オンパレード…on parade　同じような事物がずらりと並ぶこと。

5　トリッキー…tricky　ここでは、誤解を招きやすい、間違いやすいという意味。

6　同研究所…調査をおこなったのは財団法人総合初等教育研究所。

問一　二重傍線部1～4の読み方を書きなさい。

問二　傍線部1は、どのような意味か。ア～オから最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　多くの人が知らない　　イ　すべての人が知っている

ウ　知らない人もいる　　エ　知っている人がいない

オ　誰が知っているか分からない

問三　傍線部1で「知らない」のは何か。本文中から抜き出して十字以内で書きなさい。

問四　傍線部2は、どのようなニュースか。本文中の語句を用いて、十五字以内で書きなさい。

問五　空欄①～④に入る語について、それぞれのア～オから最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

①	ア　足	イ　口	ウ　手	エ　耳	オ　目
②	ア　山盛り	イ　目白押し	ウ　火の車	エ　鈴なり	オ　すし詰め
③	ア　提起	イ　展開	ウ　登場	エ　浮上	オ　発生
④	ア　応じて	イ　沿って	ウ　乗って	エ　反して	オ　寄せて

問六　空欄Aに入る漢字二字の語を本文中から選んで書きなさい。

二　次の問いに答えなさい。

問一　①～⑤の傍線部と同じ漢字を使うものをそれぞれア～エから一つ選び、符号で答えなさい。

①　大雨でジンダイな被害を受ける。

ア　勘違いもハナハだしい。

イ　本番では全力をツくす。

ウ　交番で道をタズねる。

エ　アラたな計画を立てる。

②　ヨットで太平洋をオウダンする。

ア　アタタかい料理を食べる。

イ　誘いをコトワる。

ウ　銃にタマをこめる。

エ　体をキタえる。

③　『赤毛のアン』の原書を読んでワヤクする。

ア　失言により相手の機嫌をソコねる。

イ　子供のころの思い出をカタる。

ウ　風で旗がヒルガエる。

エ　同窓会はナゴやかな雰囲気だった。

④　冷静チンチャクに行動する。

ア　入学式で制服をキる。

イ　規則をオモんじる。

ウ　庭園の花をツむ。

エ　温泉で疲れをイやす。

⑤　今年の夏はヒショ地で過ごす。

ア　ヒめられた過去が明らかになる。

イ　失恋してカナしい。

ウ　誤解を招く言い方はサける。

エ　時間をツイやす。

問七　空欄Bに「高3社会」から始まる別の見出しを書きなさい。本文中の表現を用いて十字以上二十字以内で書きなさい。

問八　傍線部3の「誤解」は、どのような誤解か。ア～エから最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　イラクの位置を知っている大学生は4割、北朝鮮の位置を知っている大学生は1割である。

イ　イラクの位置を知らない大学生は4割、北朝鮮の位置を知らない大学生は1割である。

ウ　イラクの位置を知っている大学生は4割、北朝鮮の位置を知らない大学生は1割である。

エ　イラクの位置を知らない大学生は4割、北朝鮮の位置を知っている大学生は1割である。

問九　傍線部4は、どのような意味になるか。ア～エから最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　記事の表現に問題はあるが、

イ　記事の表現に問題はなく、

ウ　記事の表現に問題がなくても、

エ　記事の表現に問題があり、

問十　傍線部5「地理学会が考えなくてはならない」ことは何か。ア～エから最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア　現代地理学における物語性喪失の原因

イ　大学生における地理の学力低下の現状

ウ　地理を選択するものが減っている理由

エ　地理学における基礎基本の明確化

問十一　次の文章は漢字の読み書きについての調査を取り上げた記事の見出しについて問題点を指摘したものである。空欄A～Eに入る語をア～コから選び、符号で答えなさい。

記事の見出しは、「落書きを『楽書き』　木かげを『小かげ』」となっている。この見出しは、「［　A　］」を「［　B　］」と書いたり、「木かげ」を「［　C　］」と書いたりする誤答が［　D　］と受け止めるのが自然である。だが、筆者によると、「楽書き」という誤答は33％、「小かげ」という誤答が、37％であったと記事は報じているという。「楽書き」や「小かげ」が多数だったわけではない。調査を行った団体のインターネットサイトでこの調査の抜粋をダウンロードすると、やはり「楽書き」の出現率は33％、「小かげ」の出現率は37％となっている。「小かげ」と書いたり、「楽書き」と書いたりしたものが大半のように誤解させる見出しはよくない。なお、「木」の訓としての「［　E　］」は常用漢字の訓として認められているが、「音訓の小・中・高等学校段階別割り振り表」では「特別なもの」「用法のごく狭いもの」とされている。「木立」や「木陰」などで使われる場合である。

ア　こ　　イ　き　　ウ　小かげ　　エ　木かげ　　オ　少数

カ　大多数　　キ　ボク　　ク　モク　　ケ　落書き　　コ　楽書き

問一　①～⑤と反対の意味を持つ熟語を語群から選び、漢字に直して書きなさい。

①　供給　　②　具体　　③　収入　　④　順守　　⑤　独立

いそん　・　いはん　・　ししゅつ　・　じゅよう　・　ちゅうしょう

問二　①～⑤の熟語の構成を説明したものをア～オから選び、符号で答えなさい。

①　屈伸　　②　惜別　　③　未完　　④　幼稚　　⑤　徐行

ア　同じような意味の漢字を重ねたもの
イ　反対または対応の意味を表す字を重ねたもの
ウ　上の字が下の字を修飾しているもの
エ　下の字が上の字の目的語・補語になっているもの
オ　上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

問四　①～⑤の意味をそれぞれア～エから一つ選び、符号で答えなさい。

①　呼び声が高い
ア　声が大きい。
イ　評判である。
ウ　来場者が多い。
エ　話が大げさである。

②　後の祭り
ア　間に合わず、手遅れになってしまうこと。
イ　終盤になって、盛り上がること。
ウ　順番が入れ替わり、混乱してしまうこと。
エ　勢いがよく、すぐに結果が出ること。

③　馬が合う
ア　敵対し、ことあるごとにぶつかる。
イ　便利で使いやすい。
ウ　一気に物事が進む。
エ　意気投合し、相性がよい。

④　立て板に水

ア　邪魔が入って、作業が滞ること。

イ　それまでと違う発想が生まれること。

ウ　言葉がつかえず、すらすら話すこと。

エ　発言したのに聞き流されること。

⑤　二の足を踏む

ア　思いきれず、ためらう。

イ　同じことを繰り返す。

ウ　あきらめられず、こだわる。

エ　決意して行動に移す。